

## 優秀賞論文要旨

# 〈歪んだ矯正〉からの離脱

—小島信夫「吃音学院」の改稿をめぐって—

藤 原 亜 衣

本論文は、小島信夫の「吃音学院」（1953年）を政治と性の表象に着目することから分析したものである。「吃音学院」は初版時に改稿がなされているが、初出と初版の差異もまた、政治と性に関連する部分が多い。なかでもとくにヒロインの柿本いね子の描写の変化に留意し、戦後の性規範の変化という視点、及びコミュニケーションの成立の有無について分析した。

「吃音学院」の吃音矯正法は、吃音の改善を目的としたものではなく、むしろコミュニケーションの成立を果たさない矯正法であると捉えることが出来る。本来の目的に沿わない矯正法がなぜ「吃音学院」に書かれたのかと問いを立て、物語に登場する吃音者に焦点を当てて考察した。

登場人物の一人の大川太助は主人公の「僕」に『球根栽培法』を勧めているように、共産党にシンパシーを持った人物である。「僕」の「再軍備反対」という台詞に首をかしげながら同意する大川を「僕」が大笑いする場面があるが、「僕」のそのふるまいは、大川の一貫性のない姿勢を批判するものであったことを、『球根栽培法』の当時の社会的位置付けを参照にしながら論じた。また、「血のメーデー事件」と「吃音学院」に書かれた吃音者の描写との共通点を見出し、吃音と共産党的矛盾を重ね合わせることで群衆性による個性の滅却に対する批判を表したのではないかと考えた。

次に、いね子の「処女」の描かれ方と「僕」とのコミュニケーションの成立との関係性を見た。いね子は諸留と「僕」から「処女」を狙われる人物である。

ここには、当時の性のモラルの問題が反映されていると分析した。また、「僕」といね子のコミュニケーションについては、いね子の最後の発声に注目し、そこに見出されるのはあたらしいコミュニケーションの端緒であるのではないかと思われる。歪んだ矯正法ではなく、新しいコミュニケーションの成立を図ったいね子を小島が描いた理由は、いね子が戦後において古い性のモラルから脱却した人物であるからだと論じた。

以上のような吃音者の姿を描写した「吃音学院」は、当時の社会情勢を登場人物に反映させ、「戦後」という新しい時代の揺らぎを表現している。

「吃音学院」は、当時の社会問題を「吃音」と重ね合わせ、登場人物を通して社会的メッセージを表した作品であると結論づけた。